

男女共同参画という考え方

1

男女共同参画

なんとなく分かりづらい「男女共同参画」。しかし、これからの世の中で、私たちが暮らしていくために、知っておけば、必ずためになることです。

昔からの慣習

「男子厨房に入らず」。昔から日本の社会では、家事は女性がするものといわれ、男性は経済的に、女性は家事などの生活的なこと、お互いが家庭を支えてきました。

性別で互いの役割を分担することは、戦後から高度経済成長期まで日本が成長していくに当たって、効率的な選択であったかもしれない。しかし、個人の思いや個性、能力などは生かされることなく、「男だから」「女だから」という理由だけで役割が決められてしまっていたのです。

男女共同参画とは

平成11年に男女共同参画社会基本法が施行されました。法の中で「男女共同参画社会

の実現を二十一世紀の我が国社会を決定する最重要課題」とされているように、本当の男女共同参画社会が求められているのです。

男女共同参画社会とは「男女がお互いにその人権を尊重しつつ、責任を分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮できる社会」のことをいいます。

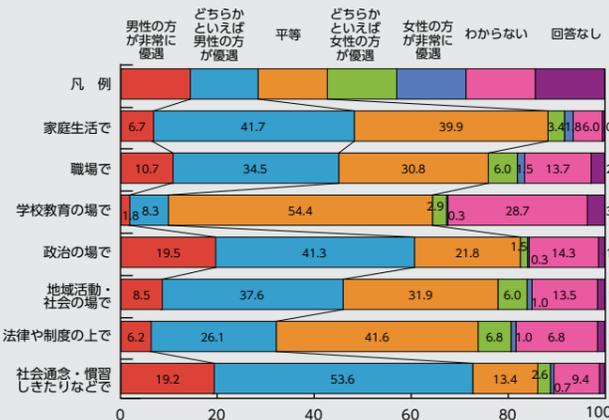
例えば、身近な話では▼家庭 家族みんなで家事や子育て、介護などを協力し合い、明るくて楽しい生活を送ることができる。▼職場 男性も女性も仕事と家庭の両立が可能な職場環境があり、一人一人がそれぞれの活躍することになる。▼学校 お互いの人格が尊重されることの大切さを学び、就職や進学でも男女の区別無く、意思を尊重し

た進路を選ぶことができる。▼地域 地域での活動や役員なども男性と女性どちらも主体的に関わり、みんなが良い地域を作っていくことができます。このような効果が期待できます。

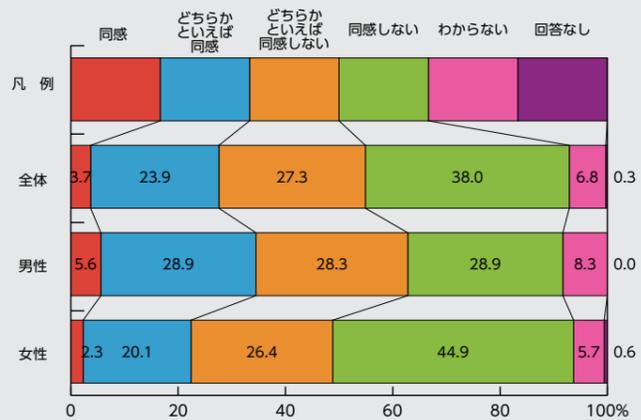
心の豊かさを

現在は、物の豊かさよりも心の豊かさが求められている世の中になっていきます。それぞれの個性を生かし合う男女共同参画の社会が求められるようになったのも、世の中の流れでは、必然であったかもしれない。

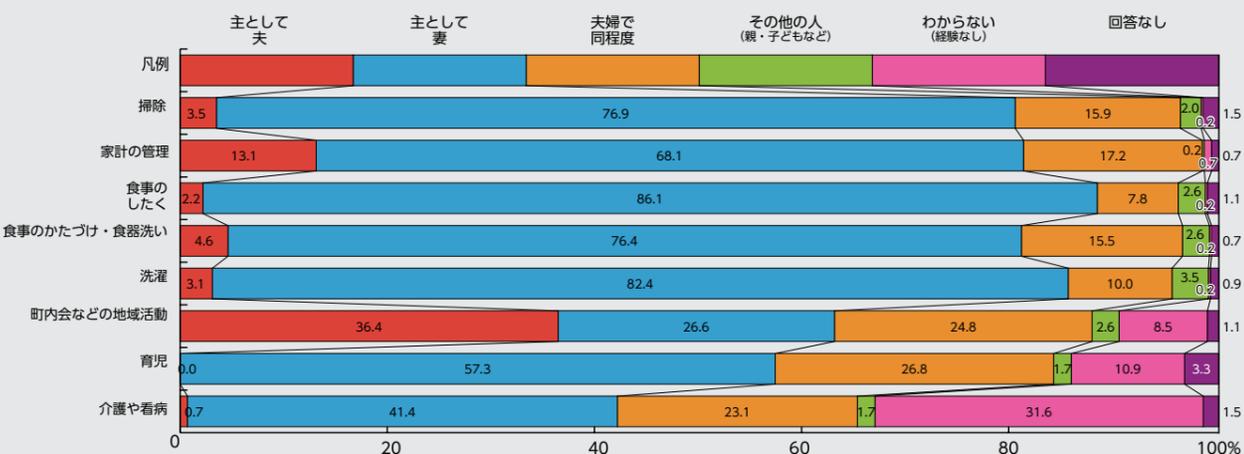
性別は、自分で選ぶことはできません。「私が、私でいられるように」。その思いをかなえるために男女共同参画社会は求められているのです。



男女の地位の平等感



「男は仕事、女は家庭」という考え方



家庭の仕事の役割分担

データからみる大津の男女共同参画

意識から分かる男女の関係

平成22年に町が行った男女共同参画に関する町民意識調査からはこんなことがわかります。

「学校教育の場」や「法律や制度上」などは平等感があるようですが、男性、女性どちらかが優遇されていると考えている人はどの分野も10%未満です。特に「社会通念・慣習など」では町民の72%が男性が優遇されていると考えています。

「男は仕事、女は家庭」という考えに、同意すると回答した人は3割です。依然として性別での役割分担意識があることがわかります。その考えに6割強の人たちですが、大津町では家庭生活のほとんどの家事を「主として妻」が担っていることがわかります。

性別での役割分担に同意しないと考える人が多い中、現実には多くの家庭で「男は仕事、女は家庭」という役割分担をしている状況があるようです。

二十歳の男女が語る 男と女

今年1月、めでたくも新成人となった2人の男女に、自分の夢や男女共同参画を語ってもらいました。



ろっかみき 六嘉美希さん (大林)

今は大学で栄養学を勉強しています。大学を卒業したら、栄養士関係の仕事をしたと思っています。男女共同参画は、テレビなどで聞いたことがあります。現在は、育児は女性为中心になっていて、職場への復帰なども難しいので、仕事も家庭も男性のサポートが必要だと思います。男性が育児をすることが、珍しいことではない世の中になってほしいですね。



さきやま 晋さん (平川)

まだまだ結婚や子どものことを考えてはいません。今までアルバイトをやったことがないので、働くことを知りたと思っています。学校では、電子工学の研究をしていて、研究者やエンジニアになりたいと思っています。理系は女性が少ないんです。女性にも素晴らしい人は多くいるので、理系などの部門でも女性が活躍していくことも必要だと思っています。